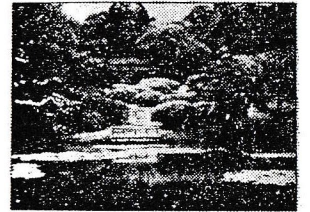


舊御殿・舊御苑は、もと南豊島御料地の内にて、御二柱の神に御由緒深きところ。御殿とは申せど、質素なる平屋にして、行幸ありし時の玉座、今もそのままに拜せらる。

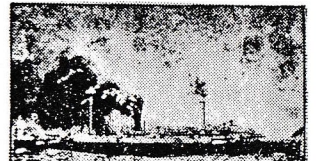
舊御苑に入れば、木立深く、道めぐり、池の眺め廣きところに、御茶屋ありて隔雲亭といふ。ほのかに承れば、この御苑は、明治天皇御みづから、森の下道・下草まで何くれと御仰せありて、自然のままに作らせたまひ、昭憲皇太后かぎりなくめでさせたまひて、しばしば行啓あらせられたりとぞ。昔の武藏野の面影、そのまま今に残りて、とこしへに大御心をしのびまつるも、いとかしこしや。



二 水兵の母

明治二十七八年戦役の時であつた。ある日、わが軍艦高千穂の一水兵が、手紙を読みながら泣いてゐた。ふと、通りかかつたある大尉がこれを見て、餘りにめめしいふるまひと思つて、

「こら、どうした。命が惜しくなつたか。妻子がこひしくなつたか。軍人となつて、軍に出たのを男子の面目とも



思はず、そのありさまは何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」

と、ことばするどくしかつた。

水兵は驚いて立ちあがり、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、

「それは餘りなおことばです。私には、妻も子もありません。私も、日本男子

です。何で命を惜しみませう。

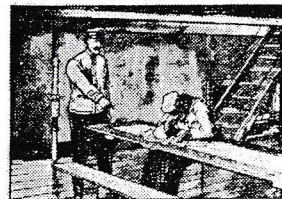
どうぞ、これをごらんください。

い。」

といつて、その手紙をさし出した。

大尉がそれを取つて見ると、次のやうなことが書いてあつた。

「聞けば、そなたは豊島沖の海戦



にも出でず、八月十日の威海衛攻撃とやらにも、かくべつの働きなかりし由、母はいかにも残念に思ひ候。何のために軍には出で候ぞ。一命を捨てて、君の御恩に報ゆるためには候はずや。村の方々は、朝に夕に、いろいろとやさしくお世話なしくだされ、一人の子が、御國のため軍に出でしことなれば、定めて不自由なることもあら

ん。何にてもゑんりよなくいへと、しんせつに仰せくだされ候。母は、その方々の顔を見ると、そなたのふがひなきことが思ひ出されて、この胸は張りさくるばかりにて候。八幡様に日參致し候も、そなたが、あつぱれなるてがらを立て候やうとの心願に候。母も人間なれば、わが子にくしとはつゆ思ひ申さず。いかばかりの思ひにて、この手紙をしたためしか、よくよくお察しくだされたく候。」

大尉は、これを読んで思はず涙を落し、水兵の手をにぎつて、

「わたしが悪かつた。おかあさんの心は、感心のほかはない。おまへの残念がるのも、もつともだ。しかし、今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことはできない。將校も兵士も、皆一つになつて働かなければならない。すべて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。おかあさんは、一命を捨てて君恩に報いよといつてゐられるが、まだその折に出あはないのだ。豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。しかし、これも仕方がない。そのうちに、はなばなしの戦争もあるだらう。その時には、おたがひにめざましい働きをして、わが高千穂艦の名をあげよう。このわけをよくおかあさんにいつてあげて、安心

なさるやうにするがよい。」

といひ聞かせた。

水兵は、頭をさげて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮し、につこりと笑つて立ち去つた。

三 姿なき入城

いとし子よ、

ラングーンは落ちたり。

いざ、汝も

勇ましく入城せよ、

姿なく、

聲なき汝なれども。

昭和十六年十二月、

ラングーン第一回の爆撃に、

汝は、別動隊編隊長として、

近郊ミンガラドン飛行場にせまり、

敵スピットファイヤー二十數機と、

空中戦はなばなく、

陸驚は、その十六機をほふれり。

更にラングーンの上空に現れ、

巨弾を投じたる一瞬、